

G O L D F I S H

56期生

I テーマ設定の理由

金魚は今では日本の身近な観賞魚として親しまれているが、もともとは中国の魚であった。金魚が日本にやってきたのは室町時代で、当時は大変な高級魚だったそうだ。

私の住む奈良県大和郡山市は、金魚の養殖がとてさかんである。町のいたる所に金魚池があり、夏休みには金魚すくい選手権大会が行われるなど、金魚はこの町と深く関わっている。「地元を再発見する」という意味で金魚について調べてみようと思った。

II 研究方法

- (1) 図書館やインターネットを利用して文献調査
- (2) 現地調査（夏休みを利用する）

III 研究内容

1 金魚の歴史

金魚の祖先は野生のフナが突然変異したもので、中国の揚子江下流で黒いフナに混ざって赤いフナが捕れるようになり、これが祖先ではないかと言われている。

金魚が日本にやってきたのは室町時代で、明から泉州左海（今の大阪府堺市）に入ったのが最初である。金魚はかつては大変な高級魚で、江戸時代初期になると大名や豪商たちの間で飼育されるようになった。江戸時代中期、享保9年に甲斐（今の山梨県）から大和（今の奈良県）に移った大名、柳沢吉里が、貧しい藩士たちの救済のために当時貴重品だった金魚を副業として養殖する事を勧めた。そして文化・文政になると日本各地で金魚の養殖が始められ一般の人々にも金魚を飼育することが流行。

この頃から、金魚を商売にする商人や町に金魚売りがあらわれるようになった。図1・図2は共に江戸時代に描かれたものである。当時は図2のように金魚を上から見ていたといわれている。



図1「風俗金魚傳」表紙



図2「金魚に餌を与える図」

2 マスコットキャラクター

大和郡山市は平成16年で市制50周年を迎え、それに合わせてマスコットキャラクターを決めた。住民から募集し、応募総数555点の中から選ばれたのはこの金魚。このマスコットキャラクターは市のホームページや市立図書館などで多く使われている。またこのマスコットキャラクターと一緒に使われているのが「平和のシンボル、金魚が泳ぐ城下町」という指標である。これは市役所に大きく書かれていた。

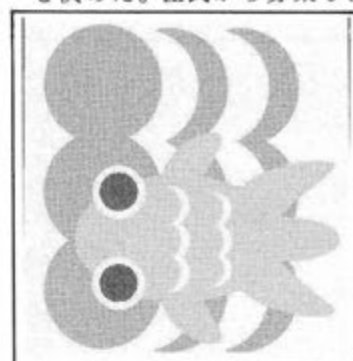


図3 マスコットキャラクター

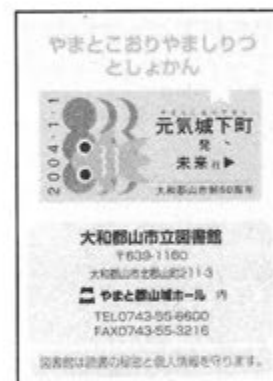


図4 図書館カレンダー



写真1 市役所

3 大和郡山市の金魚の養殖

(1) 金魚を育てる

- ①産卵
- ②ふ化…ふ化池で稚魚にかえる。
- ③えづけ…はじめはミジンコなどである程度成長したら人工のえきを与える。
- ④選別…大きさによって分ける。形や尾の悪いものをのぞく。
- ⑤とり上げ…「竹のす」やいろいろなあみを使って池からとり上げる。写真2。
- ⑥魚じめ…すぐには出荷せず、準備をととのえる。
- ⑦出荷…ビニール袋に酸素を入れて送り出す。

写真3。



写真2



写真3

(2) 現在の金魚の養殖

大和郡山市の自然条件としては水質、水利に恵まれた農業用ため池が数多くあり、ため池に発生する浮遊生物（ミジンコなど）が金魚の稚魚のえさに適していたことなど有利な条件が備わっている。これが今も養殖がさかんな理由の1つである。昭和40年代は経済発展と養殖技術の進歩に伴い生産量が年々増加し、国内はもとより欧米諸国や東南アジアなど外国にまで輸出された。

近年は都市化に伴う水質汚濁などで生産量は減少したものの、養殖農家約80戸、養殖面積約100haで、年間金魚約8000万匹、錦鯉約200万匹が生産されている。左の

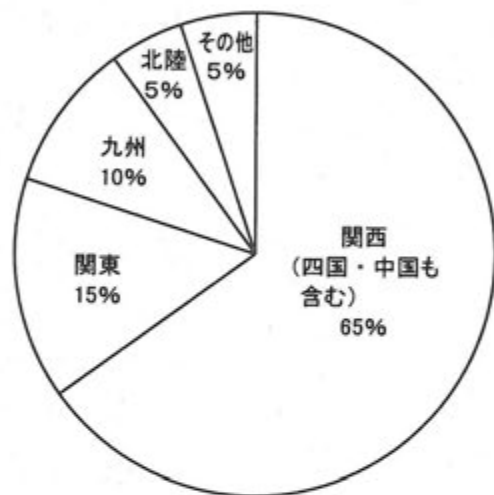


図5 金魚の送り先

円グラフは1995年に大和郡山市金魚漁業協同組合が調べた、大和郡山市の金魚の送り先を表している。四国・中国を含む関西へが65%と半分以上を占め、次に多いのが関東15%、その次が九州の5%である。その他とは東北・北海道のことで2つを合わせて5%だ。

金魚池の水は濁った緑色をしている。アオコとよばれる植物性プランクトンが発生しているためである。この水をグリーンウォーター（青水）という。水質を安定させたり、金魚の色揚げをしたりする。大和郡山市にある金魚池は、写真4のように地面を深く掘って低くした部分をコンクリートで固めたものが多い。この池の種類をタキ池という。



写真4 近鉄郡山駅から少し離れた所

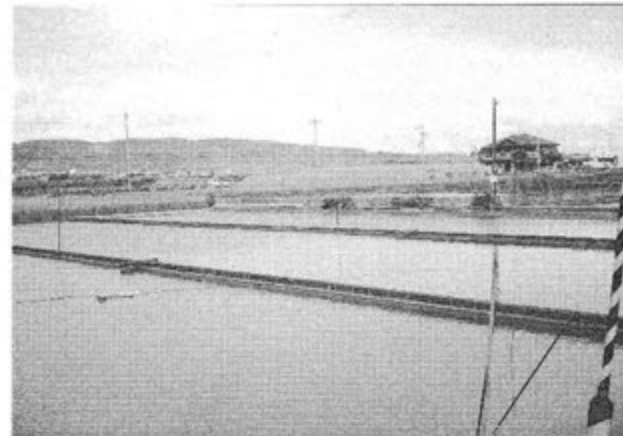


写真5 家の近くの金魚池

このあたりは田と金魚池が1:1ぐらい。ほとんどの金魚池が田から転作したものである。

4 こちくやについて



写真6 こちくや

こちくやとは大和郡山市で唯一のおみやげ屋のことである。店の名前の由来は、郡山城主だった豊臣秀長（豊臣秀吉の弟）の幼名「こちく」から。写真6で注目してほしいのは、のれんの前につるさされている1番下の金魚のマスコットと左にいる男の人の頭の大きさである。尾をのぞいても頭の2倍はある。この金魚のマスコットが道行く人の足を止めていると言っても過言ではないだろう。店の中はそれほど広くはなく、赤一色である。主に金魚のグッズを売っている。写真7は大、中、小の金魚のマスコットである。これは近鉄郡山駅付近の店の多くで見かける。こちくやでは定番の1つだ。他にもキーホルダーやガラス細工、紙ふうせん、ブリキのおもちゃなどがある。

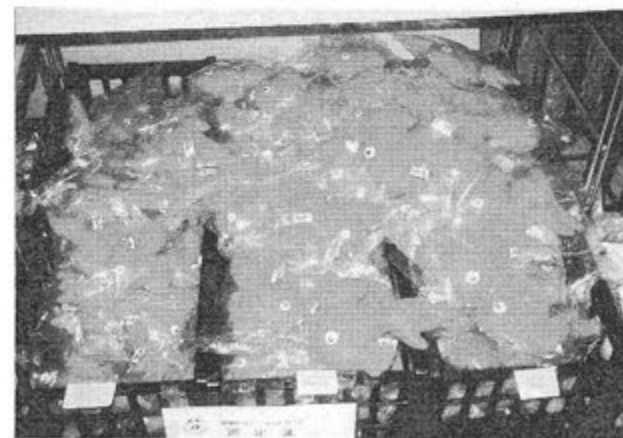


写真7 金魚のマスコット

また、この店の1番のポイントが店の横で金魚すくいを楽しめることだ。1年中できる金魚すくいはそうないだろう。しかもここでは1回50円という安さで楽しむことができる。だから店のおじさんやおばさんはお客さんに「何回分やる?」と聞く。たいていの人は2回以上やっていく。大和郡山市の金魚は元気がいいのですぐにポイが破れてしまう。1回50円なので、つい何回もやってしまう人も多い。



写真8

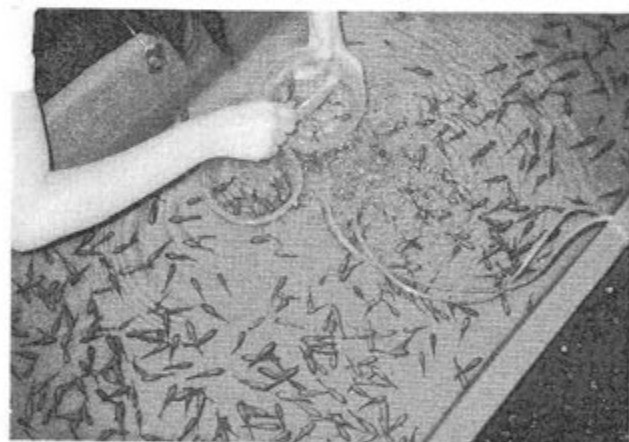


写真9

この店のポイは2種類あって、競技用のポイ（普通のポイ）と持ち帰り用のポイ（プラスチックの部分太いポイ）がある。持ち帰り用のポイですくった金魚は1回につき2匹持って帰ることができる。

〈金魚すくいのポイント〉

- ①ポイの裏をむけて使う。
- ②ポイは最初に水に入れて全部濡らす。→部分的に濡らすとそこから破れる。
- ③ポイを水槽に入れるときは、斜め45度から入れて水の抵抗を少なくする。
- ④水の中では平行移動を心がける。
- ⑤金魚をすくうのは頭からむかえにいく。
- ⑥このとき金魚の尾は乗せないようにする。
- ⑦そして斜めにポイを引き上げ、ボールの中に金魚を運ぶ。

5 金魚すくい選手権大会

今年で10回目となった金魚すくい選手権大会は、大和郡山市の注目されるイベントの1つである。8月に行われ、全国から金魚すくいファンが集まる。

3分間に何匹すくえるかを競うというルールで、今年の優勝者（一般の部）は57匹もすくっている。3秒に1匹というスピードだ。上位に入る人のほとんどは奈良県民で、日頃から練習しているという。平均して奈良県民が強いのはなぜか。それは、だいたい前日に行われる「奈良県大会」という予選を勝ち抜いた強者ぞろいだからである。また今年からは「大和郡山市大会」も行われた。そんな奈良県の強者と全国から集まった金魚すくいファン、合計1951人が青い水槽と向き合って3分間戦うのは、言ってみればかなり珍しいイベントだ。でも、誰もが参加できて楽しいイベントでもある。来年はみなさんもぜひ出場してほしい。

IV 結論

大和郡山市は昔から金魚の産地として栄え、今も人々の生活と深く関わっているということがわかった。町のいたる所に金魚のイラストがあるなど、金魚は大和郡山市の象徴だと思う。その金魚を通じて全国と交流していることをうれしく思う。金魚は日本全国どこにでもいる身近な生き物であるが、私の住む故郷、大和郡山市では、なくてはならない大切な存在だと感じた。

V 総括

ただ、地元の特産品だからという理由で始めた自由研究。知っているつもりであまり知らなかったことが多く、とても勉強になった。私のこの研究を通じて、大和郡山市のことをもっと知ってもらいたい。

また自分の住んでいる町のことを知るというのは、とても意味のあるものだと思う。「地元を再発見する」という言葉は、小6の時の総合学習を参考に考えた。その総合学習とは自分たちの校区のことをもう一度調べようというものである。小学校の社会ではまず校区について勉強し、だんだん範囲を広げていって、その県や府について習う。小6の社会は日本の歴史をやるから、小3や小4で勉強した校区のすばらしさを忘れていないのではないか、だから校区ともうすぐお別れをする小6でもう一度勉強しようというのがねらいである。それから3年がたった。大阪の学校に通っているためすっかり都会というものに慣れてしまい、地元の不便さを感じるようになった。でもやはり地元には地元のよさがある。これからもそのよさを忘れずにいたいと思う。

VI 参考文献

- ・金魚の飼い方、育て方
著者：勝田正志、大森光子
- ・奈良県のくらし（大阪書籍）
- ・わたしたちの大和郡山市（大和郡山市教育委員会）
- ・大和郡山市ホームページ
<http://www.city.yamatokoriyama.nara.jp>